

# 第1章 序 論

## 第1節 計画の背景

### 1 静岡市お茶のまちづくり宣言

平成18年5月13日、静岡のお茶が清水港から初めて直接海外へ輸出されて100年という大きな節目を迎えて、清水港お茶直輸出100周年記念イベントが開催されました。

清水港からのお茶直輸出は、茶産業の発展ばかりでなく、関連産業の発展、港の整備や静岡・清水の都市基盤の整備など、私たち静岡市の都市としての発展に大きな影響をもたらしました。

本市にとって大変意義深い記念式典の席上、日本一魅力ある“お茶のまち”を目指して、「静岡市お茶のまちづくり宣言」がなされ、その中で、「百年の後も風薫るお茶のまちづくりを目指します」と宣言されたことをきっかけに、「静岡市お茶のまち100年構想」づくりが官民一体となり進められました。

以降、「静岡市茶どころ日本一計画」づくりへと継承される“お茶のまちへの思い”の原点として、宣言の全文を紹介します。

### 静岡市お茶のまちづくり宣言

わたしたちのまち「静岡市」は、豊かな自然に恵まれ、五月には茶畑が新緑に耀き、まちじゅうが初夏の薫りに包まれます。

この“お茶のまち”は、多くの先人たちの努力により生まれ、大切に受け継がれてきました。

わたしたちは政令市として、日本一魅力ある“お茶のまち”を目指し、ここにお茶のまちづくりを宣言します。

- 一、歴史と自然、お茶農家の思いが育んだお茶づくりを受け継ぎます
- 一、お茶が教えてくれる「和の心」「ゆとりの心」「思いやりの心」を大切にします
- 一、家族や友だち、世界中の仲間にお茶の美味しい入れ方を伝えます
- 一、百年の後も風薫るお茶のまちづくりを目指します

平成18年5月13日



## 2 静岡市めざせ茶どころ日本一条例

平成20年4月21日、静岡市議会の中に、市の基幹産物であるお茶をめぐる環境を懸念し、有志による研究会が発足し政策の検討が始まりました。

検討は条例草案の方向へと進み、平成20年9月には、会派を越え、全会派から選出された議員10名による検討会へと発展していきました。

市民からの意見募集をはじめ関係団体との意見交換会等を重ね、平成20年11月定例市議会において、静岡市議会初の議員提案条例として「静岡市めざせ茶どころ日本一条例」が制定されました。

条例に規定された主な内容は次のとおりです。

### ◇目的（第1条）

静岡のお茶に関する伝統、文化、産業等を守り、静岡市を日本一の茶どころとして育て次代に継承していくための基本理念並びに茶業者、市民及び市の役割を明らかにするとともに、これに基づく施策を総合的かつ計画的に推進するための基本的な事項を定め、もって静岡のお茶に関する産業の振興及び市民の豊かで健康的な生活の向上を図ることを目的とします。

### ◇基本理念（第3条）

- 静岡のお茶の新たな価値及び需要を創り出し、常にその魅力を高めます。
- 茶業は、地域社会の活性化に貢献する産業として育成します。
- 安全で良質なお茶が安定的に供給できるよう産地の環境を保全します。
- 静岡のお茶の情報を広く発信し、日本一の茶どころにふさわしいまちづくりを行い、静岡のお茶を中心とした交流を促進します。

### ◇条例の主な内容

- 「静岡市茶どころ日本一計画」の策定（第7条）
- 「静岡市茶どころ日本一委員会」の設置（第8条）
- 「お茶の日」の制定（第9条）



## 第2節 計画の概要

### 1 計画の名称

静岡市茶どころ日本一計画～お茶のまち100年構想の実現に向けて～

### 2 茶どころ日本一計画とは

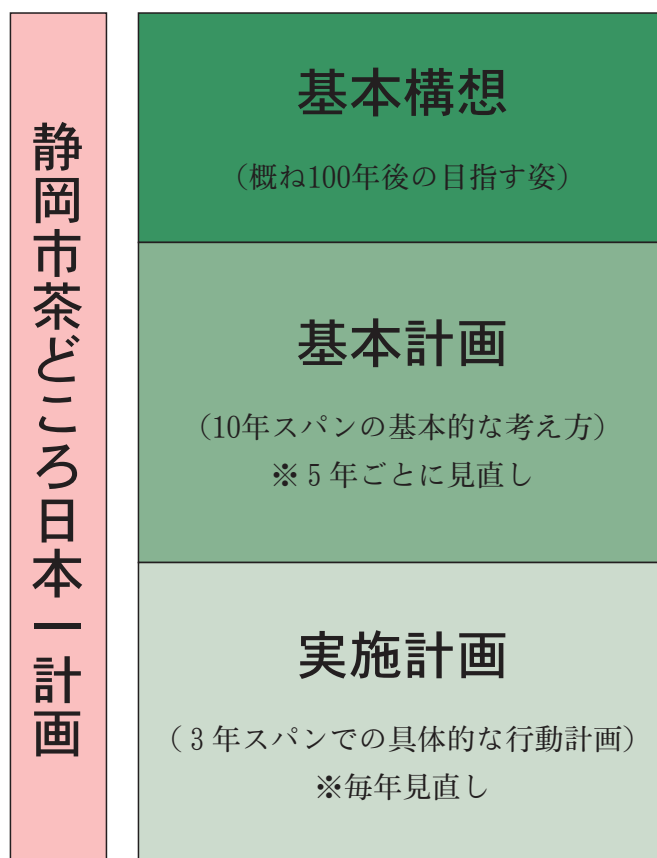
平成21年4月1日に施行された「静岡市めざせ茶どころ日本一条例」に基づいて定める計画で、静岡市のお茶に関する伝統、文化、産業等を守り、静岡市を日本一の茶どころとして育て次代に継承していくための施策などを定めます。

### 3 計画の目的

「静岡市の茶産業の振興及び市民の豊かで健康的な生活の向上」を図ること、すなわち、「お茶が育む幸せな生活」がこの地に永く続くことを目的とします。

### 4 計画のフレーム

「静岡市総合計画」との整合性を図り、次の三つから構成する計画とします。



## 第3節 お茶を取り巻く内外環境の変化

### 1 静岡市におけるお茶の歴史

《ルーツ》

静岡市のお茶は、鎌倉時代に、栃沢（葵区）生まれの聖一国師（しょういちこくし）が宋（現在の中国）から帰国したときに持ち帰った茶の種子を、足久保（葵区）に蒔いたのが始まりとされています。

また、栄西禅師（えいさいぜんじ）が中国から持ち帰った種子が、同じ頃、明恵上人（みょうえしょうにん）によって全国に広められ、その内の一箇所が「駿河の清見（きよみ）」（清水区興津付近）と伝えられています。

このように始まったお茶の栽培が南北朝時代に次第に広がり、1607年、徳川家康は大御所として駿府城に入城の後、井川（葵区）や安倍川流域で栽培される茶を駿府城御用茶として愛飲しました。1681年には、足久保から江戸将軍家へお茶の上納が始まったとされています。



## 《産業としてのお茶》

蒸製煎茶の製茶法が広まり始めた江戸後期、開国を機に茶は生糸と並びわが国の代表的な輸出戦略品となり、産業としての茶生産が一気に盛んになります。この頃すでに茶町（葵区）には多くの製茶問屋があり栄えていましたが、明治の後半になって大きく発展します。1906年（明治39年）に海野孝三郎（旧安倍郡井川村）らの尽力により清水港から直輸出されるようになると、静岡県内でのお茶作りは急速に拡大され、茶町周辺には製茶問屋によりお茶の再製工場が続々と建てられたほか、横浜や神戸にあった外国商社も静岡へ移転し、次々に再製工場が建てられました。

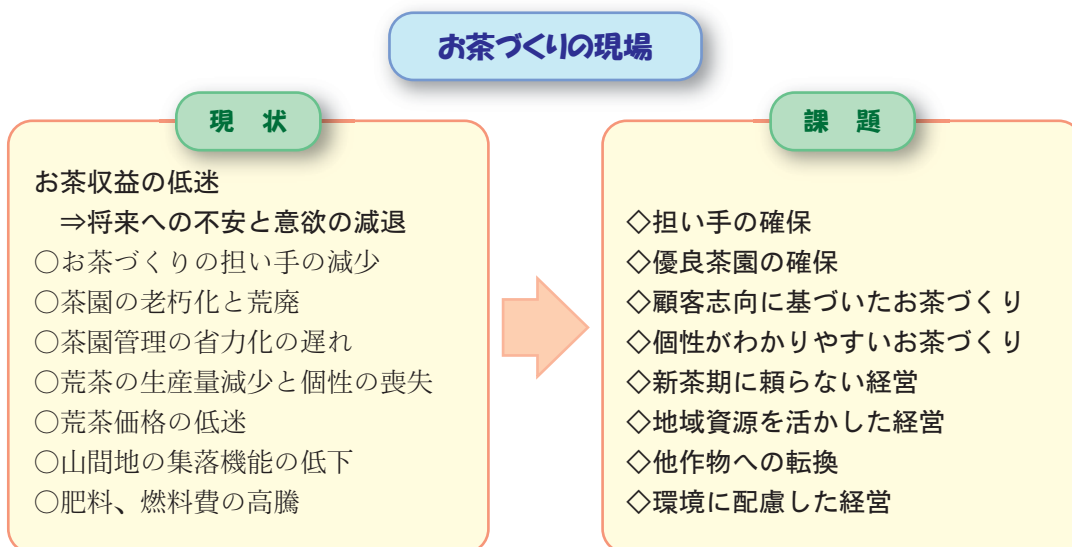
これに前後し、茶の栽培・普及、製茶の機械化についても、地元出身の先覚者らにより、大きな変革・発展が遂げられます。茶にいち早く“早・中・晩”の品種特性を見出し、茶の経済的栽培の指導や今に生きるスーパー品種「やぶきた」を発見した杉山彦三郎（旧安倍郡有度村）、横浜での茶輸出の活況を目に、幾人かの在郷商人や篤農家がリーダー性を発揮し茶の普及に努めた中で、1869年（明治2年）日本初の青年夜学校を設立、後には報徳社を起こし、茶やみかんの導入により山村の復興に努めた片平信明（旧庵原郡杉山村）、製茶機械の発明家として製茶品質の向上と生産費の減少に貢献した橋本馬吉（旧庵原郡袖師村）。明治の時代、その情熱を地元産業や地域の発展に尽くした人物の数は枚挙にいとまがありません。

こうした様々な先人たちの尽力により、茶の栽培は日本平・有度山周辺から山間地の至るところまで広がるとともに、茶町界隈を中心に流通機関が集中し、静岡市は“お茶のまち”としての色彩を色濃くしていきます。



## 2 静岡市のお茶の現状と課題

### (1) 生産面



静岡市の茶栽培面積は、平成2年に3,858haであったものが、平成20年には2,680haと約31%減少、これに伴い生葉収穫量（2年：27,290トン→20年：18,200トン、33%減）、荒茶生産量（2年：6,101トン→20年：3,780トン、38%減）も大幅に減少しています。

この背景には、高齢化や後継者不足による生産者の減少がありますが、主な原因は荒茶価格の低迷による収益性の低下です。急須で入れて飲むリーフ茶需要が上級茶ほど減退し、荒茶価格の水準自体が低下しています。お茶収入の減少を農外収入により補うため兼業化が進み、茶園管理の粗放化や老朽化した茶園の再改植の遅れ、さらに収益性の低下へと悪循環となっています。

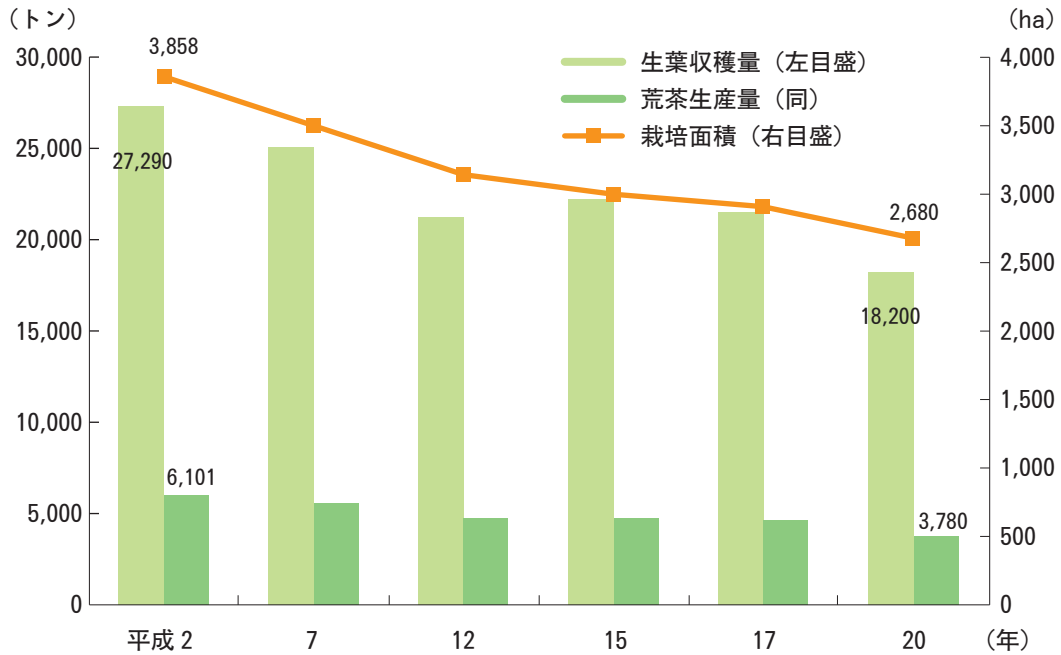
特に本市の茶園は急傾斜地に多いため、乗用型摘採機など機械化の導入が困難で、省力化や作業負担の軽減化が進んでいませんし、中山間地域で生産されるお茶は、一番茶の出荷時期が遅く荒茶市場では品質が価格に反映されにくい傾向があります。

本市のお茶づくりは、中山間地域を中心に上級煎茶を主体とした生産をしてきただけに、近年のライフスタイルの変化や景気後退による消費量の減少、荒茶価格の低下が生産意欲の減退や産業としての魅力の希薄化を引き起こしていると思われます。

これらから、今後は、GAP（※1：生産工程管理）の導入による環境に配慮した茶業経営や、農業以外からの参入も踏まえた担い手の確保や、茶専門小売店や企業や消費者を巻き込んだ、現代人の嗜好に合ったお茶づくりを進めていくことが重要と考えられます。

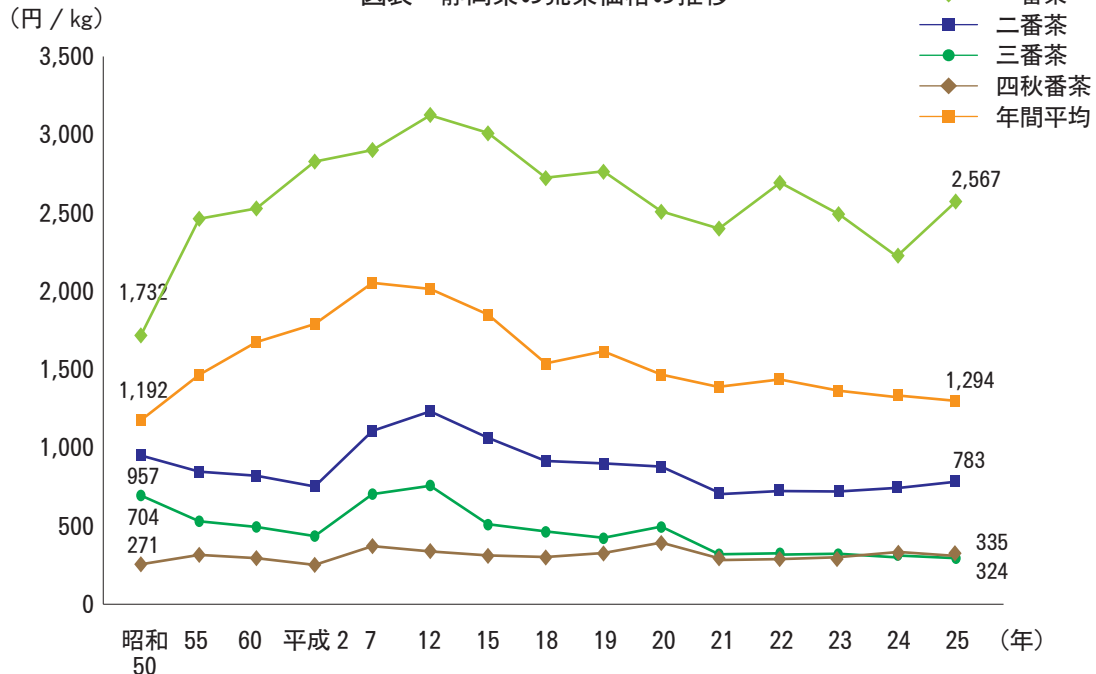


図表 静岡市の茶生産関連指標の推移



資料：静岡農林統計情報協会「静岡農林水産統計年報 農林編」

図表 静岡県の荒茶価格の推移

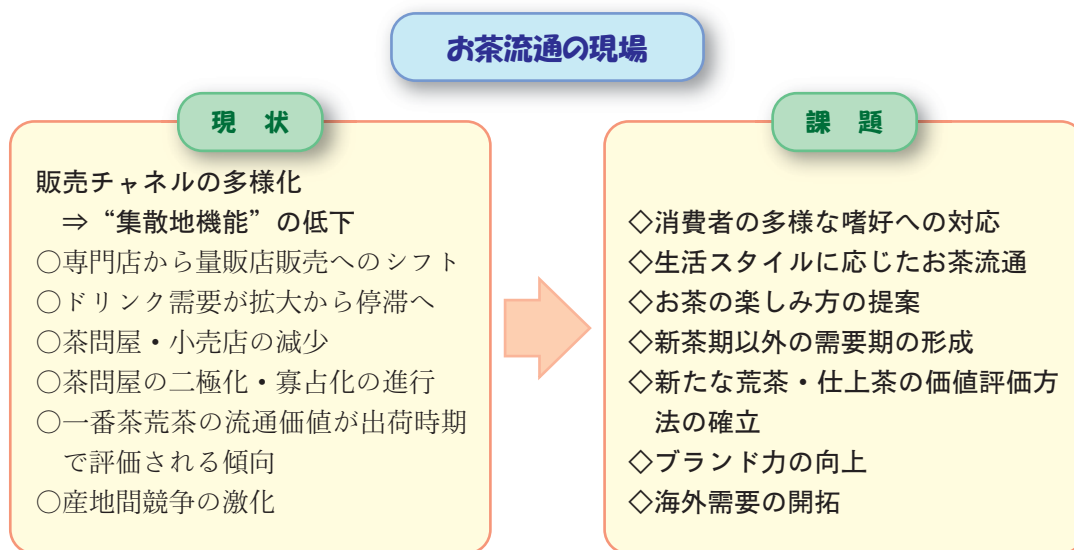


注) 平成 7 年以降の年平均価格は経済連発表の茶期別平均価格と静岡農政事務所公表の茶期別荒茶生産量から推定

資料：静岡県茶業の現状



## (2) 流通面



お茶取引の場の一つである(株)静岡茶市場（葵区北番町）では、国内荒茶生産量の約1割が安定的に取引されており、茶の集散機能を担っていますが、上級茶の消費の減少等により取扱量、荒茶価格が低迷し、取扱金額の減少が顕著になっています。

そして、消費者に対する緑茶販売の中心を担ってきた茶専門小売店は、スーパーマーケットなど大型小売店の出店増加やインターネットを含めた通信販売の拡大など、販売チャネルの多様化により競争が激化し、淘汰も進んでいます。

そのため、市内の茶問屋の多くが、茶専門小売店を主な販売先とすることから、茶問屋の経営もまた厳しさを増していますが、近年急速に増加した緑茶ドリンク需要に対応して、ドリンクメーカーに原料供給する大手茶問屋は業務内容を拡大しており、二極化傾向がみられます。

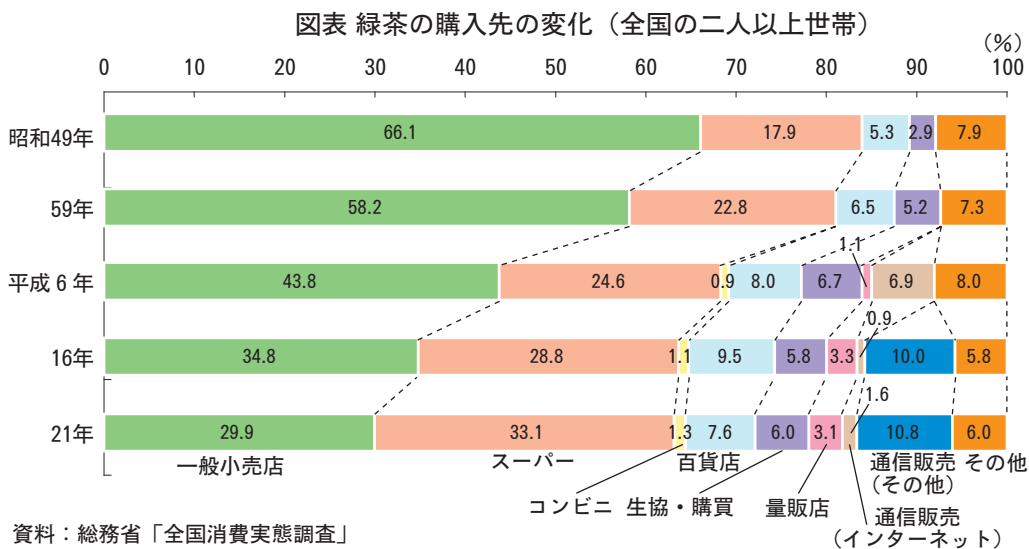
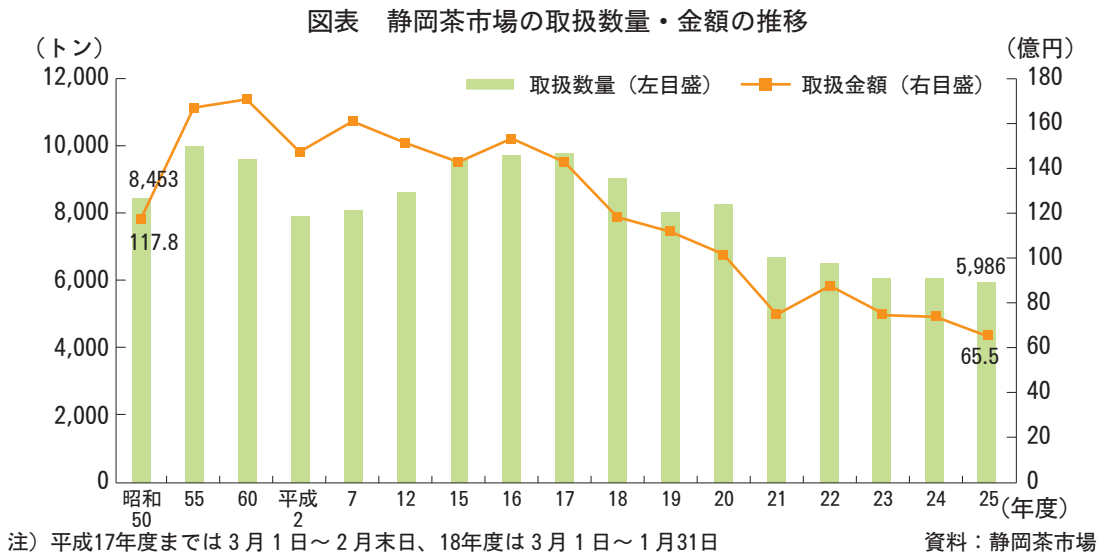
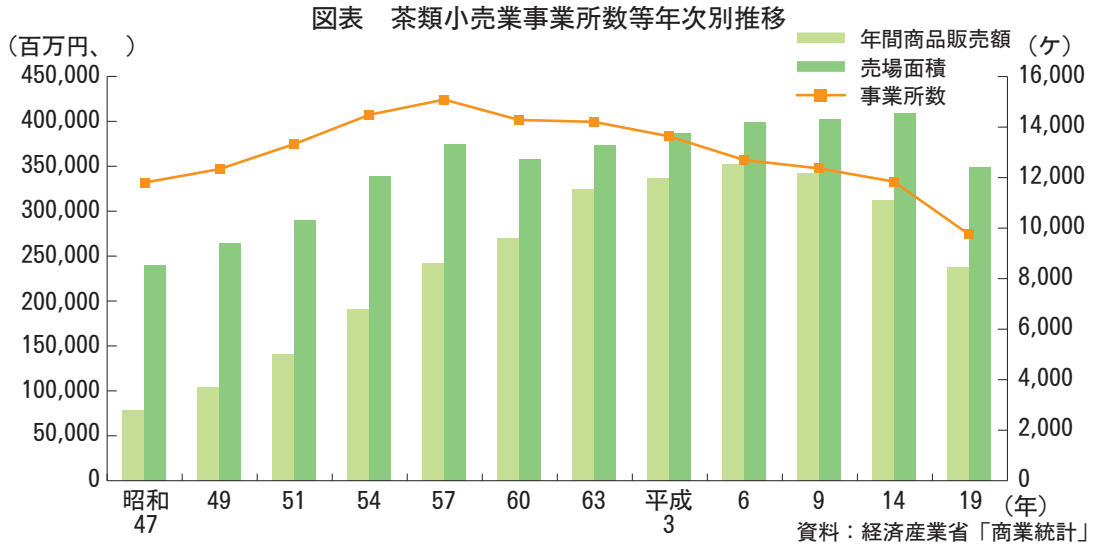
こうした流通構造の変化は、お茶普及の礎を築いてきた本市の茶業界にとって逆風となっていますが、最近では新しく追い風も吹き始めています。

一つには、輸入茶が、消費者の安全・安心ニーズの高まりや、緑茶ドリンクにおける原産国表示の義務化の動きを受けて、近年減少の傾向が見られます。その一方で、海外では、欧米を中心に、和食への関心の高まりとともに、緑茶が注目を集めており、健康志向に対する関心とも相まって輸出量が増加しています。ただし茶の輸出にあたっては輸出先の国の厳しい残留農薬基準をクリアする必要があります。

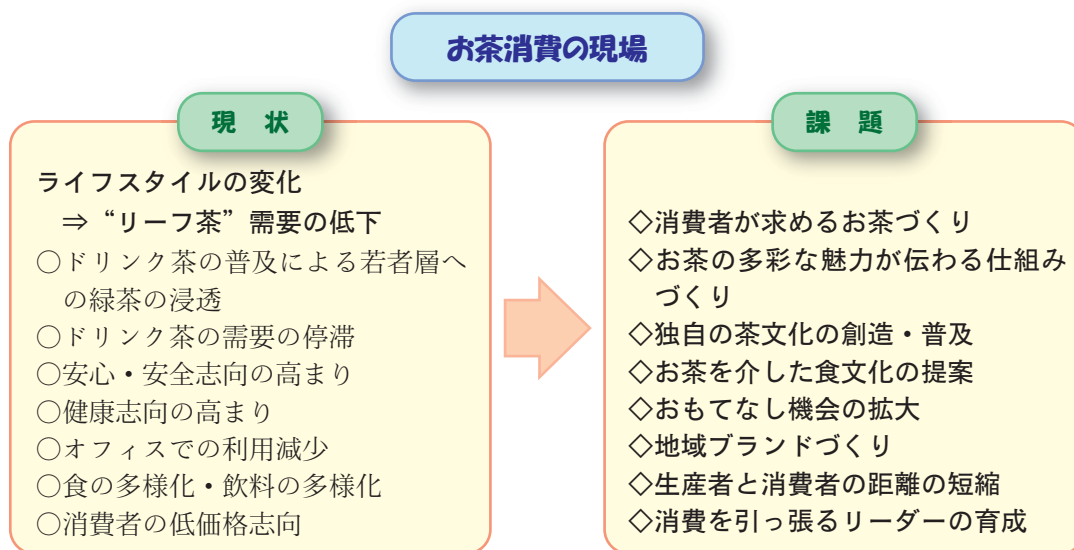
したがって、海外市場の開拓や、新茶期以外の需要期の形成、お茶の楽しみ方の提案などにより、新たな販路を切り開いていくことが求められます。







### (3) 消費・文化面



緑茶の国内消費量は、平成17年から減少傾向にあります。生活スタイルの変化や核家族化の進行等により、リーフ茶の需要が低下しているものと考えられます。

家計調査によるとリーフ茶の一世帯当たり（2人以上の世帯）の支出金額は減少を続けています。購入数量については平成24年には年間900グラムを下回りました。

一方、ドリンクの支出金額は増加基調であったのがミネラルウォーター等の需要の伸びにより近年減少に転じていますが、依然としてリーフ茶を上回る状況にあります。

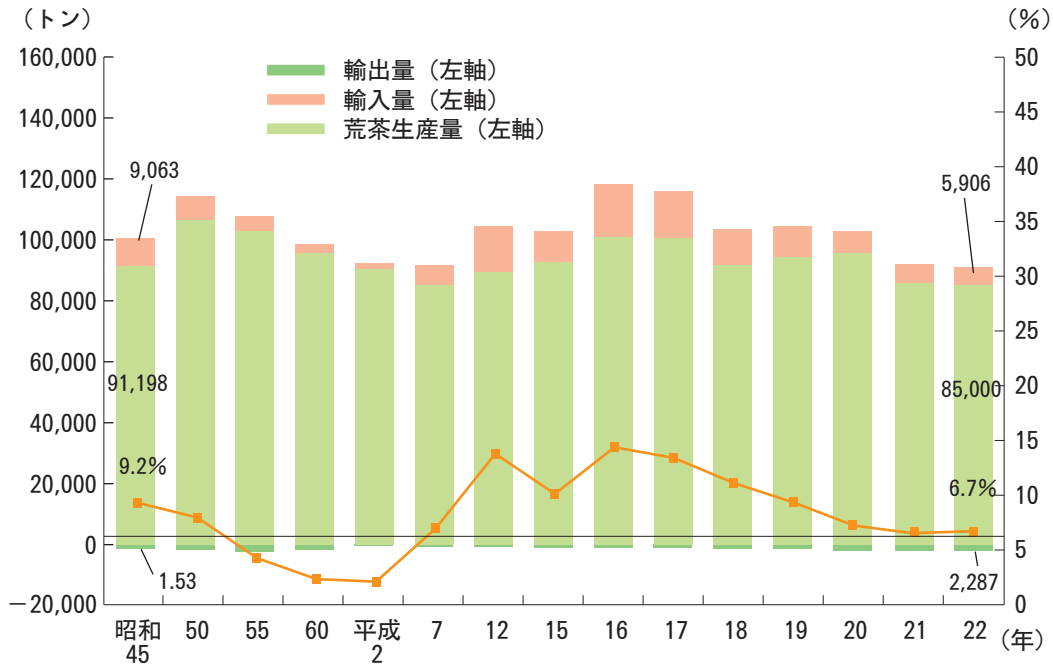
消費構造については、世界的な金融危機以降の景気後退による厳しい経済状況により、上級茶が売れず、市場は低価格化、流通主導に構造が変化しています。

リーフ茶需要の減退、ドリンク需用の低迷という茶業界にとって厳しい状況にありますが、消費者は日本の文化である緑茶に“やすらぎ”“リラックス”“安心”等を求めているという調査結果もあり、急須で入れるリーフ茶に対する潜在的な需要があると思われます。

そこで「簡便性」、「健康」、「安全」などの消費者が求めるお茶づくり、地域ブランド茶づくり、おもてなしの機会の拡大などを進め、“お茶のまち静岡市”として、お茶を後世へと継承していくべきものと思います。



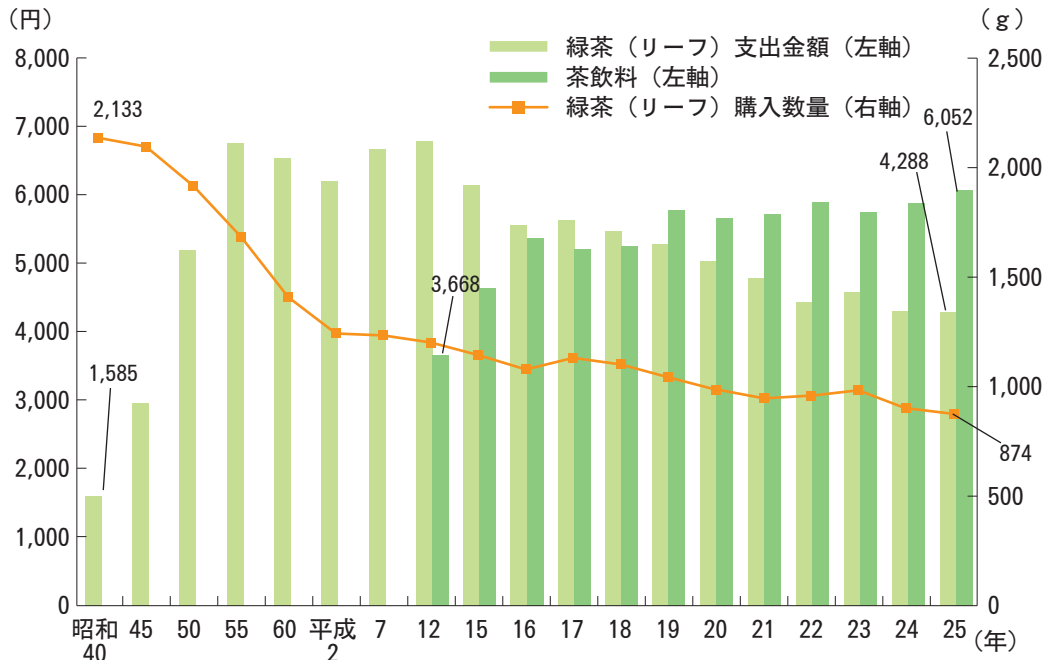
図表 緑茶の国内需要動向



注) 荒茶生産量は一部主生産県計

資料：農林水産省「作物統計」、「茶統計年報」、財務省「通関統計」

図表 緑茶（リーフ）とドリンクの一世帯当り購入数量と支出金額



注) 全国の二人以上世帯

資料：総務省「家計調査年報」、「家計調査報告」



### 3 市民の“お茶のまち”への思い ～市民意識調査結果より～

お茶のまち100年構想づくりに先駆けて、平成18年度に本市が実施した市民意識調査では、「市民が誇るお茶のまちづくりについて」質問しています。

その中で、「静岡市は100年後もお茶のまちであってほしいと思いますか」との問いに対して、97%もの人が「思う」と答えており、市民がこぞってお茶サポーターと考えても過言ではないと思われれます。

また、回答者が描く“100年後のお茶のまち静岡市”のイメージは、「茶畑の景色があちこちにあるまち」「皆がゆとりの心、お茶の心をもっているまち」でした。

そのほか、お茶のまち100年構想づくりに対し1,000件を超す提案をいただきました。以下は、その抜粋です。

「どこの産地にも負けない、誰もが知ってる、『これだ』っていう自慢できるお茶を育てること」(20代/男性)

「お茶→水だと思えます。ロハスなまちづくりが、お茶のまちをつくるのだと思えます」(30代/女性)

「都市化することで、東京や名古屋を目指すのではなく、ゆとりある住みよいまちにするからこそ、お茶のまちだと思う。散発的で一時的なイベントの多用より、根本的に静岡のあり方を行政だけでなく、市民、さらに全世界の人の知恵を借りて提案すべきだと思う」(30代/男性)

「ただ茶の生産が多いのではなく、暮らしやすいシンボルとしての性格を強調すべき。単純に茶だけを取り上げるのではなく、茶菓子、茶器、茶漬けなど、関連商品を豊かにすることが肝要」(20代/男性)

「緑茶喫茶もいいけれど、和菓子屋さんで美味しい和菓子とお茶をいっしょに気軽にいただけるコーナーなんかがあるとうれしい。観光客も気軽に入れるような」(50代/女性)





#### 4 静岡市のこれからの動き

平成17年に政令指定都市へ移行した本市は、大きな変化を続け、第3次静岡市総合計画に示した目指すまちの姿「世界に輝く静岡」の実現に向け歩みを進めています。

- 平成24年4月に静岡県内の新東名高速道路が開通し、静岡市内に複数のインターチェンジ、サービスエリア、パーキングエリアが設置されたことで、県外からのアクセスが向上し、観光客の増大、サービスエリア等でのお茶を含めた農産物のPRや販売の機会の増加が期待されています。
- 「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録され、和食や日本茶の良さが見直されています。また、海外において、日本食ブーム、日本茶のニーズが増大するなど、日本茶の海外輸出に向けた機運が高まり、市内においても茶商、生産者で輸出に向けた取り組みが始まっています。
- 平成21年6月の富士山静岡空港の開港、「富士山」の世界遺産登録により、三保松原を有する静岡市のブランドイメージの向上、海外、県外からの観光客増大の好機を迎えています。

#### 5 踏まえるべき社会経済環境の変化

##### (1) 人口減少と少子・高齢化の進行

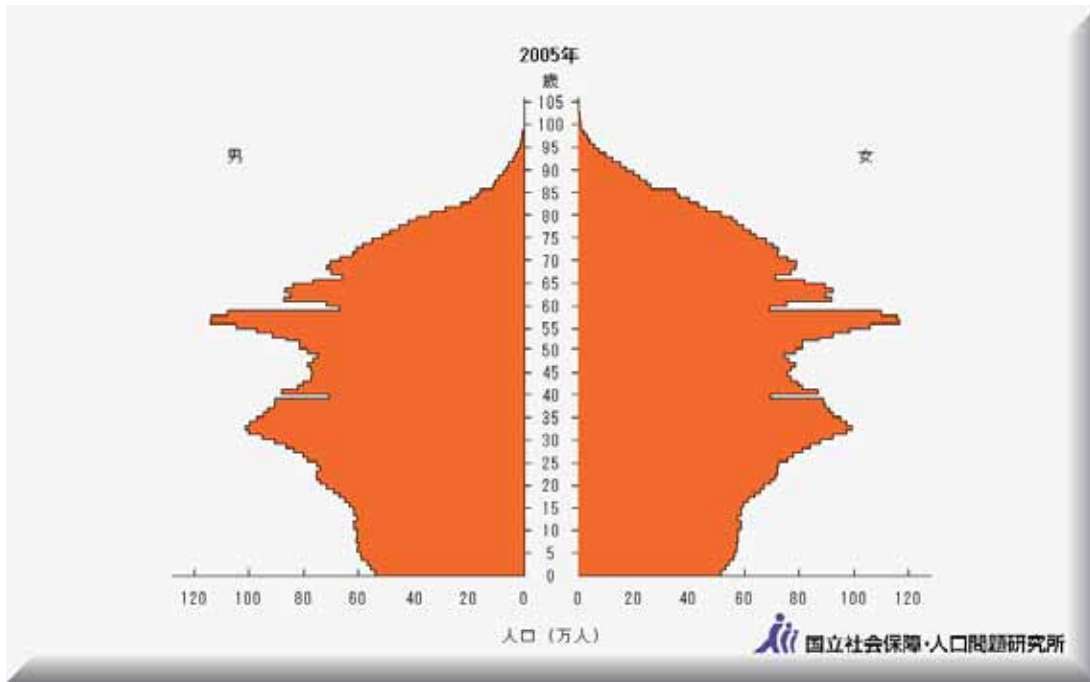
すでに日本は、少子化の深化によって、人口減少局面に転換したと言われています。国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、2005年に1億2,777万人であった人口が、50年後（2055年）には8,993万人に、そして100年後（2105年）には4,459万人と、6～7割も減少する見込です。その一方で、高齢化は今後も進みます。65歳以上人口は、2005年の2,576万人が、50年後（2055年）には3,646万人に増加、100年後（2105年）には2,263万人と減少しますが、高齢化率は、20.2%（2005年）→40.5%（2055年）→50.8%（2105年）と、2人に1人が高齢者という時代がやってきます。

人口減少や少子・高齢化が進むことで、生産・流通面では、後継者や労働力の確保がさらに難しくなります。特に、茶生産の主な担い手である中山間地域の過疎化が深刻化することが懸念され、農業以外からの参入や、都市部などから人を呼び込むことが重要となるでしょう。

同時に、人口減少はマーケット規模の縮小を意味しますが、健康、福祉、余暇、学習など新たな市場が開けていく可能性があり、新しい視点からの商品開発が必要になると考えられます。

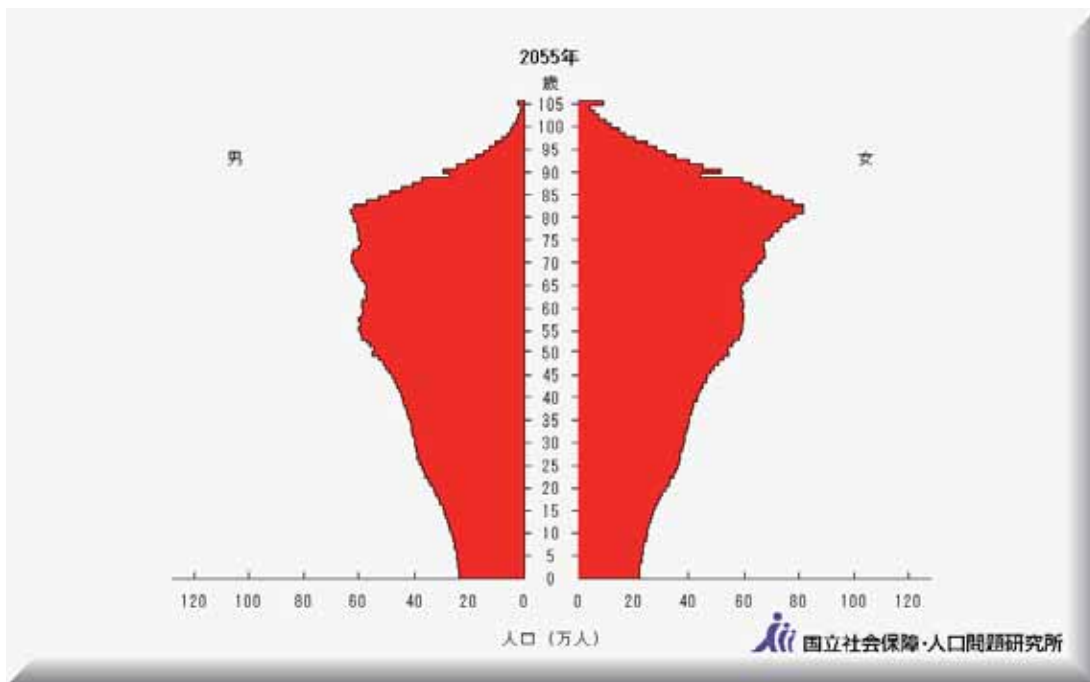


図表 2005年人口ピラミッド



資料：国立社会保障・人口問題研究所

図表 2055年人口ピラミッド



資料：国立社会保障・人口問題研究所

## (2) 社会経済のグローバル化の進展

交通システムや情報通信技術の発展に伴い、経済、文化、科学など様々な分野でボーダレス化が進み、ヒト・モノ・カネ・情報などの国境を越えた移動・交流が図られています。これによって、国際社会・経済の動向が、直接国内経済・産業に影響を与えるなど、世界との結びつきが緊密化し、相互依存関係が深まっています。

お茶についても、「世界の工場」と化した中国を筆頭に安価なお茶が一定量輸入されていますが、一方で、欧米などで日本食ブームの風に乗れ、緑茶の輸出量が増加基調にあるように、海外市場をターゲットにした事業展開が期待できます。平成21年6月に開港した富士山静岡空港の就航先と連携し、お茶の消費拡大、お茶ファンの増加、さらにはお茶のまちづくりに活かす方策を考えることが重要となります。

## (3) 価値観・ライフスタイルの多様化

「物質的な豊かさ」から「心の豊かさ」へとと言われて久しくなりますが、社会の成熟化が進む中で、価値観や個性、感性を大切に“自分らしく生きたい”と考える向きが強まっています。

たとえば、地域への貢献を通じて、自己実現を図ろうとする欲求の高まりから、NPOやコミュニティビジネスが注目されるようになってきました。また、観光の形態は、従来の名所旧跡を「見る」ものから、地域の自然・文化・産業を「体験」、「学習」する方向へと多様化・個性化しており、従来は観光資源とは捉えていなかったものでも、磨き次第で人を呼び込む資産となるようになりました。

時代や社会の動きを敏感に読み、変化・対応・活用していくことが、これからは重要と考えられます。

## (4) 循環型社会の構築

二酸化炭素排出量の急増による地球温暖化や酸性雨、熱帯林の減少など、地球規模での環境悪化が進んでいます。そのため、日本においても、大量生産・大量消費・大量廃棄の経済社会システムから、経済と環境が調和した循環型経済社会システムへの転換を目指す動きがみられます。

これからの時代においては、環境への配慮を欠く企業は、市場からの撤退を迫られる可能性が広がっています。自然・森林資源を保全する意味でも、環境負荷の低減に前向きに取り組むことが大切になります。





## (5) ストレス社会の進行

ストレス社会と言われる中、多くの人が社会の高度化や複雑化に伴い、過度の緊張や不安に包まれ生活しています。特に近年は小学校や中学校など、子供たちの社会にもストレスの波は押し寄せています。ストレスは、心や体の病を引き起こすだけでなく、家庭や職場、学校が本来持っている活動機能を著しく阻害します。ストレスの原因は様々ですが、これからの少子高齢化や社会経済のグローバル化の潮流は、ストレス要因との接触をますます増大させていくことも懸念されます。

緑茶に含まれるうまみ成分・テアニンには、ストレスの軽減作用やリラックス効果が報告されていますが、科学的な機能性だけでなく、お茶を介した会話がストレス解消に役立つことなども踏まえ、お茶を囲んで談笑する場づくりを進めていくべきと考えられます。

